

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 8 月 1 日現在

機関番号：12201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25420624

研究課題名(和文) 中国広州市城中村の持続的居住環境形成に向けた集落固有性の評価

研究課題名(英文) Evaluation of Urban Villages' Characteristics for Sustainable Living Environment in Guangzhou City, China

研究代表者

三橋 伸夫 (Mitsuhashi, Nobuo)

宇都宮大学・地域デザイン科学部・教授

研究者番号：50229746

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：中国広州市の城中村および近郊農村を対象に、急速な経済成長を背景として行われた都市化、高密度住宅化を防止するための産業振興および居住環境整備の方策について検討した。その結果、これら農村集落がその歴史文化的、産業的な特性を生かした経済的振興と居住環境整備を両立させることには多くの障がいがあることが明らかとなった。不安定な外部経済への依存は持続的な集落経営に結びつかず、村(村民委員会)による将来計画の策定が望まれる。広州市は近郊農村の農業・観光産業育成に向けた技術的支援と資金提供を行うべきことを提言する。

研究成果の概要(英文)：The study examined to evaluate characteristics of "Urban Villages" and adjacent rural villages in order to clarifying sustainable living environment of those villages in Guangzhou City, China. Encouraging industries for agriculture, sightseeing of historical environment and green-tourism is rather difficult for those villages to realize by those own capital and talent. The village committee should tackle planning its future vision with support by Guangzhou City authorities.

研究分野：農村計画

キーワード：城中村 中国 広州市 集落固有性 居住環境整備 産業振興

1. 研究開始当初の背景

中国大都市は一般に、1980年代からのいわゆる改革開放期以降の旺盛な経済発展の下、急激な市街地の膨張により、近郊農村を次々にその市街地内に取り込んでいった。こうして市街地内に存在するようになった農村集落を城中村と呼ぶ。わが国と異なる中国独自の社会経済条件として、都市内における城中村は、村民委員会が自治団体として土地所有の権利を保持しており、独自の社会制度の下、経済条件の変化に対応した経済活動を展開するようになった。

こうして城中村は農村集落としての歴史的、社会経済的な固有の特性を中国の急激な経済成長の過程で喪失してきた。宅地あるいは商工業用地、道路等に転用されて農地は徐々に失われ、圧倒的な都市開発圧力と多数の出稼ぎ労働者がもたらす住宅需要を背景に、不動産投資に活路を見出さざるを得ない状況にあった。すなわち、集落の居住域は新築住宅で埋め尽くされ、個々の住宅も増改築により上へと伸びた。居住密度が高まり、居住環境は悪化することとなった。

2. 研究の目的

中国では、急激な経済発展による都市化と都市・農村の二重制度に起因して、沿岸部大都市を中心に、農村集落でありながら極めて高層高密度な「城中村」が形成され、住環境、防災、治安等の問題を抱えている。このような事態に対しその原因である住宅・不動産投資によらない、集落の固有性を生かした、都市近郊らしい空間的なゆとりと農的環境を保全する居住環境整備並びに産業振興施策を検討して行く必要がある。

そこで本研究では、中国広州市内の城中村を対象とし、各城中村の特徴に着目し、今後の各集落固有の居住環境整備並びに産業振興施策の指針となる、個々の集落固有性を明らかにすることを目的とする。

また、急激に変化する城中村のみを対象にすることで農村集落の固有性を十分に捉えきれない恐れがあるため、城中村の原型ともいべき広州市近郊の農村集落も対象とし、集落振興方策と都市化への対処の状況把握を行った。

3. 研究の方法

(1) 集落固有性の把握

集落固有性の具体的な内容として、空間的固有性、文化的固有性、産業的固有性の3つの視点を軸として、城中村集落における集落固有性に関する項目を作成した(表1)。

(2) 研究対象

本研究では、広州市の都市計画当局が2009年に整備が必要な城中村として指定したことから小洲村、黄辺村、黄埔村、鴉崗村の4村を選定し、加えて、広州市の中心市街地から、比較的距離が離れており、農村景観が一定程度残っている大嶺村、華嶺村、京塘村および

蓮塘村の4村を選定した(図1)。

(3) 調査方法

各集落(村民委員会)への聞き取り調査をもとに、世帯・人口および出稼ぎ外来住民について把握した。歴史・文化については、同じく聞き取り調査により、伝統的な建物、祭礼・習俗および信仰などを把握した。産業では、農業とその他の産業に分けて、産業形態、主な生産品、産業構成や新たな取組などの現状を把握した。

また、広州市が提供する各集落の白地図を入手し、居住域における建物の建設状況、居住域周辺の村域内土地利用状況を把握した。

表1 集落固有性の項目

文化・観光資源	自然	自然景観・緑 動植物	地場産業	食品産業	主食品等 醸造
	建造物	街並み 歴史的建造物		繊維産業	織物 合成繊維
福祉	特産物	特産物 郷土料理	農地利用	その他	木 紙 茶 窯業 機械・金業 畜産
	郷土技芸	生産技術 民芸品 郷土芸能 習俗、行事、祭り		直接の利用	観光・農園利用 所有者制度等 付加価値農業 その他
	人材	技術等を生み出す人	間接的利用	農産物活用	
	民間医療	自然療法 植物療法 漢方薬療法	農地転用	建物 運動施設 その他	

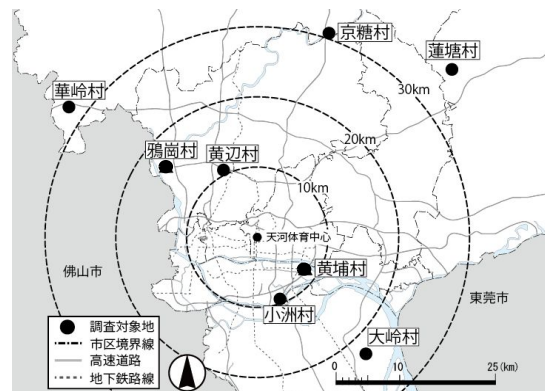


図1 調査対象集落の位置

4. 研究成果

(1) 城中村および近郊農村の諸特性

表1に城中村および近郊農村の歴史・文化、産業ならびに建物・土地利用について、諸特性を整理した。このうち、産業的特性に着目し、(a)農業、(b)歴史的環境を活かした観光、(c)グリーンツーリズム対応、の3つの側面に分けて記述する。

(a) 農業

近郊農村は城中村と比較して農業が占める産業的な位置づけは当然高いが、その振興策を阻むものの1つとして集落(生産大隊)のもつ閉鎖性が指摘できる。例えば、京塘村はレンコンとサツマイモが特産で品質も高いが、村を挙げての生産には規模の限界があり、農産加工による高付加価値化の途も村の経済力の弱さから展望が開けない。両村とも道路などインフラ整備が未だ不十分なことも農業振興に結び付かない要因である。果樹栽培が盛んな小洲村では、水辺の自然生態を生かす市植物園の拡張整備のため大規模に農地が買収

され規模が縮小した。都市開発圧力が農業の衰退に拍車をかけている。

他方、華嶺村のように農業労働力の空洞化も兆している。外資企業が村から農地を借り受け、出稼ぎ労働者を雇用して経営している。蓮塘村では村内から 200 人ほどが出稼ぎで他出している。村内に空き家が目立ち、「空心村」問題が顕在化している。

(b) 歴史的環境を活かした観光

大嶺村では、歴史文化名村の指定を受け、遊歩道、案内看板を整備し、住宅増改築・新築にも景観に配慮した取組を行う。歴史的環境を活かして集落振興を図っている城中村として黄浦村が挙げられる。

黄浦村は 19 世紀アヘン戦争後のフランスとの修好通商条約が締結された地であり、中華民国期に黄浦軍官学校が立地、現在その跡地が保存されている。こうした歴史的事跡を基盤に観光地化が図られ、多くの来訪者が飲食店、土産物店を利用する。

小洲村では近隣の大学城（複数の大学キャンパスを集めた教育研究拠点）に関連する予備校が立地し、多くの若者が通うほか、水路、河岸（荷役場）、廟や祠、伝統住居などの伝統的環境を訪れる観光客でにぎわう（図 2）。しかし、住宅増改築による居住密度の増加は、伝統的な環境の悪化を招来している。

蓮塘村では、池塘に南面して清時代に建てられた伝統住居と廟が整然と並ぶ清朝期の伝統的な村落空間をよく残しており、歴史文化保護区が設定される。しかし、これら伝統住居では既に空き家化が進行し、所有者の意向をとりまとめるのが難しく、政府補助金による一定規模の修復事業を行うための要件を満たせない。老朽化が進み、村単独の事業化も財政的に困難である。

(c) グリーンツーリズム対応

都市近郊の立地を生かしたグリーンツーリズムの取り組みは各村で動いている。京塘村では農村レストランが基本農田保護区内で営業を開始しているが、法令違反で先行き不透明である。鉞泉源が見つかっているが活用の用途は立っていない。華嶺村では集落裏山を開発して展望公園を造成し、ため池湖畔に釣り施設を整備中である。しかし、上海市近郊農村に見られるような企業投資の大規模な施設はなく、いずれも個人または村単独の取組に止まっている。

表 2 調査対象集落の特性（つづき）

村名	黄边村	雅商村	小洲村	黄浦村
行政区	白雲区	白雲区	海珠区	海珠区
分類	城中村			
自然立地	池塘 河川・水路			
歴史文化	歴史的建築(住宅) 祠堂 涼亭 歴史文化保護区/歴史文化名村			
産業	基本農田保護区 農業への外部企業参入 特徴ある農産物 空心村問題 経済活動	製造業	商業	農業・観光 観光
社会	流入住民 出稼ぎ 立地(隣接施設)	地下鉄駅/ 工業団地	物流センター 大学城	歴史的事跡



図 2 小洲村における飲食・小売店舗の分布

(2) 城中村および近郊農村の居住と建設の動向

城中村および近郊農村に共通して、文化革命期のベビーブームに起因する 2000 年代前後からの世帯増加が住宅建設を惹起した。各村は村内に新居住地を計画し、広州市の認可にもとづいて建設がなされた。

近隣に大規模な工業団地が立地する大嶺村では、既に在来住民を上回る流入住民を抱える。村が小規模工業団地地をもつ華嶺村、村内経営者による製造事業所がある京塘村は、いずれも 200 人ほどの出稼ぎ流入住民を擁し、城中村の後を追う傾向を示す。一方、黄边村では村域内の小規模下請け工場の多くが 2016 年時点では閉鎖され、中国経済の景気減速の影響を受けている。城中村、近郊農村の出稼ぎ流入者に依存する不動産経営はこのようにグローバル経済に左右される不安定さをもつ。

近郊農村の建ぺい率、容積率（2013 年ないし 2016 年）をみると、城中村の都市化前（1990 年）当時とほぼ同じレベルである。現在の住宅を中心とする建物状況は、城中村では小洲村が 4 階、黄边村が 6 階にピークをもつが、近郊農村では 1～3 階が大半である。また、建物の構造について、階数と密接に関連し、前者では RC 造、RC+レンガ造が大半となっているが、後者ではレンガ+木造が未だ多くを占めている。両者に共通して建て替え事例は階

表 2 調査対象集落の特性

村名	京塘村	蓮塘村	大嶺村	華嶺村
行政区	从化区	增城区	番禺区	花都区
分類	近郊農村			
自然立地	池塘 河川・水路			
歴史文化	歴史的建築(住宅) 祠堂 涼亭 歴史文化保護区/歴史文化名村			
産業	基本農田保護区 農業への外部企業参入 特徴ある農産物 空心村問題 経済活動	農業	農業・製造業	製造業・観光 農業
社会	流入住民 出稼ぎ 立地(隣接施設)		工業団地	小規模工業団地

数が増加し、殆どを RC 造, RC+レンガ造が占める。近郊農村の居住密度も経済発展により徐々に高まっている。

(3) まとめ

近郊農村がその歴史文化的、産業的な特性を生かした経済的振興と居住環境整備を両立させることには多くの障がいがあることが明らかとなった。不安定な外部経済への依存は持続的な集落経営に結びつかず、村(村民委員会)による将来を見据えた総合計画の策定が望まれる。広州市は近郊農村の不動産経済への傾斜を食い止める産業育成に向けた技術的支援と資金提供を行うべきである。

表3 調査対象集落の居住状況と建設動向 *未調査

村名	京塘村	蓮塘村	大岭村	華岭村	
居住人口	3200<2014>	2800<2014>	2300<2013>	1400<2014>	
流入人口	200<2014>	0<2014>	3000<2013>	200<2014>	
流入人口率(%)	5.9	0.0	56.6	12.5	
面積	400	610	300	535	
居住域面積(ha)	43	33	27	22	
居住域面積率(%)	10.8	5.4	9.0	4.1	
居住人口密度(人/ha)	79.1	84.8	196.3	72.7	
居住域の建ぺい率(%)	33.5<2014>	54.1<2016>	40.0<2013>	26.8<2013>	
<>は調査年	同上	過去の建ぺい率(%)	同上	過去の建ぺい率(%)	
居住域の容積率(%)	64.3<2014>	97.1<2016>	71.0<2013>	37.2<2013>	
同上	過去の容積率(%)	過去の容積率(%)	過去の容積率(%)	過去の容積率(%)	
建物	4階以上建物棟数の割合(%)	4.2<2014>	1.0<2016>	1.9<2013>	0.8<2013>
<>は調査年	2階以上建物棟数の割合(%)	43.4<2014>	45.7<2016>	54.2<2013>	21.8<2013>
RC造・RC+レンガ造建物棟数の割合(%)	55.3<2014>	41.0<2016>	66.2<2013>	35.1<2013>	
建物変化	4階以上建物棟数増加率(%)	455.5(49棟)	40.0(4棟)	92.9(13棟)	20.0(1棟)
<>は変化年()は増加数	<2009_2014>	<2014_2016>	<2010_2013>	<2010_2013>	
RC造・RC+レンガ造建物棟数の増加率(%)	312.5(25棟)	16.1(83棟)	4.6(42棟)	12.8(31棟)	
<>は変化年()は増加数	<2009_2014>	<2014_2016>	<2010_2013>	<2010_2013>	

表3 (つづき)

村名	黄边村	鸦岗村	小洲村	黄埔村	
居住人口	2600<2012>	-	6000<2012>	-	
流入人口	16000<2012>	-	3000<2012>	-	
流入人口率(%)	86.0	-	33.3	-	
面積	100	-	450	-	
居住域面積(ha)	18	51	49	42	
居住域面積率(%)	18.0	-	10.9	-	
居住人口密度(人/ha)	1033.3	-	183.7	-	
居住域の建ぺい率(%)	64.8<2013>	-	47.9<2013>	-	
<>は調査年	同上	過去の建ぺい率(%)	同上	過去の建ぺい率(%)	
居住域の容積率(%)	48.0<1990>	42.8<1990>	47.8<1990>	31.2<1990>	
同上	過去の容積率(%)	過去の容積率(%)	過去の容積率(%)	過去の容積率(%)	
建物	4階以上建物棟数の割合(%)	64.2<2011>	17.2<2011>	15.6<2011>	24.2<2011>
<>は調査年	2階以上建物棟数の割合(%)	86.9<2013>	-	47.3<2013>	-
RC造・RC+レンガ造建物棟数の割合(%)	95.0<2013>	-	89.4<2013>	-	
建物変化	4階以上建物棟数増加率(%)	16.2(130棟)	-	76.3(484棟)	-
<>は変化年()は増加数	<2010_2013>	<2011_2013>	<2011_2013>	<2011_2013>	
RC造・RC+レンガ造建物棟数の増加率(%)	11.3(110棟)	-	13.0(254棟)	-	
<>は変化年()は増加数	<2011_2013>	<2011_2013>	<2011_2013>	<2011_2013>	

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 0件)

[学会発表](計 4件)

- 陶鋒・本庄宏行・三橋伸夫・佐藤栄治・黎庶旌・望月瞬:各集落の産業的固有性からみた集落固有性 中国広州市城中村における集落固有性に関する研究その1, 日本建築学会学術講演梗概集 no.6076, 2014.9
- 本庄宏行・陶鋒・三橋伸夫・佐藤栄治・黎庶旌・望月瞬:居住域内における空間構成からみた集落固有性 中国広州市城中村における集落固有性に関する研究その2, 日本建築学会学術講演梗概集 no.6077, 2014.9
- 本庄宏行・三橋伸夫・佐藤栄治・黎庶旌・

宇賀神直彬・榊京太郎・陶鋒:中国広州市の都市近郊農村における集落居住域の建設動向 中国広州市城中村における集落固有性に関する研究その3, 日本建築学会学術講演梗概集 no.6078, 2015.9

- 三橋伸夫・佐藤栄治・本庄宏行・齊藤太紀:中国広州市近郊農村のもつ諸特性と住宅建設 - 中国広州市城中村の集落固有性に関する研究その4, 日本建築学会学術講演梗概集, 2017.9

[図書](計 0件)

[産業財産権]

出願状況(計 0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

三橋伸夫(MITSUHASHI Nobuo)
宇都宮大学・地域デザイン科学部・教授
研究者番号:50229746

(2)研究分担者

佐藤栄治(SATOH Eiji)
宇都宮大学・地域デザイン科学部・准教授
研究者番号:40453964

(3)連携研究者

-
研究者番号:-

(4)研究協力者

黎庶旌(Li Shujing)
本庄宏行(HONJO Hiroyuki)
望月瞬(MOCHIDUKI Shun)
宇賀神直彬(UGAJIN Tadayoshi)
榊京太郎(SAKAKI Keitarou)
陶鋒(TOU Hou)
齊藤太紀(SAITOH Hiroki)